

小・中学生の言語連想における性差

—— 名詞に対する反応語の分析 ——

1)

荻野七重 小杉洋子 近藤和子

言語連想における性差の問題は、あまり多くとりあげられていない。これまでの研究によって明らかにされた主なところを簡単にまとめてみると次のようである。

まず、刺激語が与えられてから反応語を生じるまでの潜伏時は、女子の方が男子よりも長いこと (Cramer, 1968)、時間制限法によって行った場合、1刺激語あたりの反応語数は、男子よりも女子の方が多く、この傾向は学年が上がるにつれて強まりその差が増大すること (清水他, 1976) が示されている。

また反応の種類にも性差が認められている。殆どの研究結果は、女子の方が男子に比較し、共通の反応をする傾向が高い、という点で一致している。この傾向は、出現頻度の高い反応語 (このような反応語を共通反応とか平凡反応、あるいは最多反応と呼んでいる) の出現頻度とかその比率に基づいて検討される。Palermo (1962) は、児童および大学生を対象として行った連想実験において、上位3位までの反応を検討し、女子の方が多くの共通反応を生じていることを示している。日本では梅本(1969)の研究が、大学生を対象とし、最多反応と次多反応の分析によって、同様の結果を得ている。清水他 (1976) は、反応種類数を検討し、女子よりも男子の方が種類数が多いことを指摘しているが、これも共通性についてのこれまでの研究結果を支持するものといえるであろう。

連想反応をその品詞によって分析した多くの研究がある。これらの研究が性差に関して示すところはだいたい次のようである。等質反応 (刺激語と同じ品詞の反応語, paradigmatic responses

に相当) と異質反応 (刺激語と異なる品詞の反応語, syntactic responses に相当) という分類のカテゴリーを用いて、小学1年、3年、5年のデータを分析した Entwisle (1966) は、以下のようなことを指摘している。男子は女子に比較して言語発達が少し遅れる。即ち等質反応は年齢とともに増大する傾向を示すが、女子の場合男子よりも多くの等質反応が見られる。ただしこの発達の遅れは一時的なものであり、非常に小さい。性差は年少における方がよりはっきりしている。そのため小学校1年生のみに限定して分析した結果、二つの点を示された。一つは、性差と知能との交互作用であり、男子の方が知能との対応が明確である。即ち、男子の方が知能水準が低くなるにつれて等質反応の比率の減少する傾向が著しい。第二の点は、性差と品詞との交互作用であり、男子と女子とでは品詞によって等質反応の出方が異なる。即ち、女子は形容詞および動詞における等質反応の出現率が男子よりも高い。以上の Entwisle の指摘の中で、年長になると性差が不明確になるという点は Palermo (1962) の指摘とも一致する。

Entwisle はまた、大学生についても、女子の方が男子よりも等質反応が多いことを示している。しかし、梅本 (1969) の研究はこれと対立する結果を示している。また、等質反応の中の形容詞について Entwisle は、形容詞に対する反応語に反対語の出る比率が女子の方が高いことを指摘しているが、梅本は、男子の方が刺激語と反対関係にある反応語を生ずる傾向が強い、と指摘している。但し梅本の場合は、分析対象を形容詞に限定しておらず、分析の方法も Entwisle とは異なるので、

簡単に対立した結果を示すということはできない。荻野他(1977)は、小・中学生を対象とした実験で、等質反応と異質反応という二分法によらずに、刺激語と反応語の品詞のパターンによって細かく分類して検討した結果、他のどれにも性差を見出すことができなかったが、名詞刺激に対する形容詞反応に性差を認めることができた。これによれば、女子の方が男子よりも名詞反応に対する形容詞反応が多い。

反応語の内容について、戸川他(1958)は、情情的反応に属するものが男子よりも女子に多いことを見出しており、梅本の研究もまたこれを支持している。このことは、荻野他の示した、女子の方が形容詞反応が多いということとも通じるところがあると思われる。梅本はさらに、女性優位の反応には、女性の生活と密着したものが多いことを指摘している。

今回の研究は、先に述べてきたような問題について検討することが目的である。なお、ここに用いた資料は、1977年から1978年にかけて行った実験から得たもののうちの一部、即ち名詞を刺激語とした場合のもののみであり、動詞や形容詞を刺激語に用いたものについては、次の分析にまわすことにした。

方 法

被験者 東京都立小学校2校および小平市立小学校児童1596名、東京都立中学校および小平市立中学校生徒258名。各学年、男女別被験者数は表1に示す通りである。

表1 被験者の構成

性 別	小学校(年)					中学校(年)	
	1	2	3	4	5	6	2
男	146	150	140	158	177	168	129
女	158	156	185	154	126	148	129
合 計	304	306	325	312	303	316	258

実験期日 1977年12月から1978年2月まで

材料 先づ刺激語として、語彙頻数表(愛育研究所紀要, 1943), 教育基本語彙(坂本一郎, 1965), 連想基準表(梅本堯夫, 1969)より、幼児にも理解できるような使用頻度の高い単語を100語(名詞40語, 形容詞30語, 動詞30語)選択し、3才児から中学3年生まで計1172名に対し、言語連想の実験を行った(1974年11月から1975年1月)。この結果を参考に53語(名詞17語, 形容詞19語, 動詞17語)を選択し、今回の実験の刺激語とした(詳細は荻野他, 1979参照)。

手続 実験者が刺激語を口頭で提示し、被験者は自由連想法により、同一刺激語に2語反応する。先づ、反応語1語を106枚綴の小冊子(第1反応語用の白い頁と、第2反応語用の黄色い頁とを交互に折り込んだ縦・横6×13cmの小冊子)の白いカードに記入する。次いで、約15秒後に実験者が同一刺激語を再度提示し、被験者は次の黄色いカードに異なる反応語を記入する(小冊子の全頁の左上に刺激語とその番号が印刷されている)。実験者は、“一つの言葉を聞いて思い浮ぶ言葉の一つ書くように、次に同じ言葉がもう一度繰り返されるので、二度目の時は、最初に書いたのとは別の言葉をもう一つ書くように”という主旨の教示を与える。以上は、学級単位の集団実験法によって行われた。

結 果

今回の連想実験は、被験者に対して2つの反応語を求めている。従ってこれから示す資料はすべて、特にことわらない限り、第1反応と第2反応からなっている。

I 全反応を対象とした分析

1. **最多反応(平凡反応)** 出現頻度の高い反応語を上位1位のみ、1位から3位まで、および1位から5位まで選び出し、それらの反応が全可能反応数(被験者数×2)に占めるパーセントを求めたものが表2である。これによると、いずれの場合も、女子の方が男子よりも一貫して高いパーセントを示した。分散分析の結果も、すべての場合において、性差に有意差が認められた。

表 2 最多反応率（17刺激語〈名詞〉の平均，％）

最多反応	性別	小学校（年）					中学校（年）	
		1	2	3	4	5	6	2
1 位	男	20.9	21.4	21.0	22.7	21.0	21.1	17.5
	女	22.4	23.7	22.5	24.0	22.3	22.4	19.3
1 ～ 3 位	男	36.7	40.5	40.5	43.4	42.0	43.4	36.7
	女	40.2	44.5	42.9	46.6	44.2	45.2	39.4
1 ～ 5 位	男	45.3	49.8	50.5	53.6	51.8	53.5	46.8
	女	49.7	54.3	53.1	57.2	54.4	55.8	49.2

2. 品詞別反応種類数 反応語の品詞別に反応種類数を求めたものが表 3 である。ここに示す数値は、17の刺激語について生じた全反応種類数を被験者数×2で割り 100 倍したものである。これによると、一貫して女子が高い値を示すその他を別として、どの品詞にも有意な差は認められず、男子の方が高い値を示す名詞と動詞でもその差は 10%水準にとどまった。

3. 品詞別反応出現率 反応語をその品詞によって分類し、全可能反応数（被験者数×2）に占めるその割合を求め、17刺激語について平均したものが表 4 である。これによると、名詞（等質反応に相当）については明確な差が認められないが、形容詞とその他（擬声語、擬態語からなる副詞が主である）は女子の反応率が高く、動詞は男

子が高い傾向が読みとられる。この分類における形容詞の中には形容動詞も含まれている。品詞別に分散分析による検定を行った結果、学年にはどの場合にも有意な差が認められたが、性差に有意差が認められたのは形容詞($p<0.05$)と、その他($p<0.01$)の場合のみであり、動詞については差を認めることができなかった。しかし学年別に t 検定を行った結果では、名詞では中学 2 年、動詞では小学 5 年に有意差が認められた。この傾向は第 1 反応のみを分析の対象とした場合も同様であった。異なる点は、その他の品詞における男女差が、第 1 反応と第 2 反応を合わせた場合よりもやや大きくあらわれていた点であり、1%水準の有意差を示していた。

また、形容詞、動詞の反応語の中には、否定語

表 3 品詞別反応種類数（17刺激語〈名詞〉の合計，指数）

品 詞	性別	小学校（年）					中学校（年）	
		1	2	3	4	5	6	2
名 詞	男	180.8	185.0	225.7	190.5	230.8	263.1	349.2
	女	156.6	165.1	182.4	170.5	248.8	261.5	331.0
形 容 詞	男	54.5	58.7	62.9	45.3	37.6	42.9	44.2
	女	46.2	54.8	53.0	48.4	51.6	46.3	50.8
動 詞	男	70.5	70.0	58.9	47.8	42.4	35.4	54.3
	女	71.8	57.7	52.4	45.5	42.1	37.5	48.1
そ の 他	男	4.5	5.3	8.6	7.6	3.7	3.9	4.3
	女	9.2	9.3	14.1	9.7	9.9	4.1	8.1
計	男	310.3	319.0	356.1	291.2	314.5	345.3	452.0
	女	283.8	286.9	301.9	274.1	352.4	349.4	438.0

表 4 品詞別反応出現率 (17刺激語〈名詞〉の平均, %)

品 詞	性別	小 学 校 (年)					中学校(年)	
		1	2	3	4	5	6	2
名 詞	男	平均 33.1 (S D)(9.4)	34.3 (9.5)	44.1 (9.1)	45.8 (9.8)	53.9 (10.7)	61.5 (9.9)	63.8 (10.2)
	女	平均 32.4 (S D)(12.1)	37.4 (12.3)	44.3 (9.9)	46.7 (11.9)	53.8 (12.3)	61.1 (11.9)	59.8 (11.9)
	<i>t</i>	0.530	2.040	0.156	0.936	0.052	0.222	2.460*
形 容 詞	男	平均 13.2 (S D)(8.7)	17.6 (10.3)	16.3 (7.8)	17.3 (10.5)	13.3 (8.8)	14.6 (9.3)	13.5 (10.1)
	女	平均 14.0 (S D)(10.2)	18.4 (11.1)	17.9 (10.6)	19.6 (12.5)	17.0 (11.2)	16.0 (11.2)	17.1 (11.7)
	<i>t</i>	0.680	0.704	1.427	1.877	3.513**	1.494	2.807*
動 詞	男	平均 32.1 (S D)(11.6)	33.0 (11.7)	28.7 (11.8)	26.4 (12.7)	24.4 (12.3)	19.5 (10.4)	18.1 (9.5)
	女	平均 33.3 (S D)(12.5)	31.7 (12.3)	27.5 (11.3)	24.9 (13.4)	21.1 (10.8)	19.4 (10.2)	17.9 (9.8)
	<i>t</i>	1.028	0.925	1.610	1.734	3.052**	0.103	0.304
そ の 他	男	平均 0.9 (S D)(2.0)	0.7 (1.4)	1.3 (2.5)	1.3 (2.6)	0.7 (1.6)	0.6 (1.3)	0.5 (0.7)
	女	平均 1.6 (S D)(2.8)	1.4 (2.5)	2.6 (4.4)	1.8 (3.8)	1.4 (2.3)	0.9 (2.1)	1.0 (1.8)
	<i>t</i>	2.533*	1.776	2.302*	1.322	3.631**	1.288	1.784

* $p < .05$ ** $p < .01$

(未然形)の反応語がよく現れる。これをまとめたものが表5である。これに示されるように、否定語は形容詞よりも動詞において著しく、女子よりも男子に多く現れている。分散分析の結果は、形容詞、動詞とも、学年、性別による十分に有意な

差を認めることはできなかったが、形容詞の場合の学年、動詞の場合の学年および性別による差は10%水準の値を示しており、検討の余地があると思われる。

表 5 否定語の品詞別反応出現率 (17刺激語〈名詞〉の合計, %)

品 詞	性別	小 学 校 (年)					中学校(年)	
		1	2	3	4	5	6	2
形 容 詞	男	1.7	0.7	3.2	1.3	0.8	1.8	0.0
	女	2.6	1.6	1.9	0.6	2.0	1.7	0.0
動 詞	男	7.5	10.9	13.6	4.8	2.0	0.9	2.7
	女	6.4	5.8	4.9	1.9	0.4	0.3	4.7

II 反応出現率の男女差が1%以上の反応語を対象とした分析

男女差を、全反応語に基づいてみてゆくのではなく、出現率に性差のみられる反応語を中心にみてゆくことが、ここにおける分析の目的である。そのために、反応語別に男女の反応率を求め、その差が1%以上になるものを選び出し、これを分析の対象とした。事実、この方法をとることによって、全反応を扱った場合には得られない側面への接近が可能となり、また全反応を扱うことによ

には、動詞よりも形容詞の種類数が多い。これは、女子では形容詞反応が優勢であり、男子では動詞反応が優勢であるというIの3で示された結果と一致する。また動詞の種類数が年齢とともに減少していくのに対して、形容詞のそれは減少する傾向がなく、女子においては増大する傾向さえみられる。その他に関しては男子に優勢なものは殆どなく、女子において優勢なものが少数みられる。この種の反応はまた、小学3、4年をピークとして減少していく。また、男子に優勢な反応語と女

表 6 品詞別反応種類数（反応率の男女差1%以上の反応語、17刺激語〈名詞〉の合計）

反応率の大小	品詞	小学校(年)					中学校(年)	
		1	2	3	4	5	6	2
(I) 男子>女子	名詞	50	46	48	59	54	58	93
	形容詞	12	14	15	10	3	18	12
	動詞	22	31	26	25	27	10	18
	その他	0	0	0	1	1	0	0
	計	84	91	89	95	85	86	123
(II) 男子<女子	名詞	41	50	56	67	67	70	69
	形容詞	13	21	23	26	25	20	27
	動詞	20	14	13	10	12	15	15
	その他	2	2	7	3	2	2	1
	計	76	87	99	106	106	107	112
(I+II)	名詞	91	96	104	126	121	128	162
	形容詞	25	35	38	36	28	38	39
	動詞	42	45	39	35	39	25	33
	その他	2	2	7	4	3	2	1
	計	160	178	188	201	191	193	235

ってかえって輪郭が曖昧になる傾向のある性差が浮かびあがってくるのがみられた。

1. 反応種類数 反応率の男女差が1%以上の反応語を、男子の方が反応率の高いものと女子の方が反応率の高いものとに分け、その反応語の種類数を品詞別に示したものが表6である。これによると、名詞では、男子の場合にも女子の場合にも、他の品詞よりも反応種類数が多い。しかし性差はみられない。一方、形容詞と動詞については男子と女子の間に対照的な差異がみとめられる。即ち男子に優勢な反応語には、形容詞よりも動詞の種類数が多いのに対して、女子に優勢な反応語

に優勢な反応語を合わせて、その種類数を求めたところ、その総合計は学年とともに増大する傾向がみられた。これは年齢の上昇に伴う性差の増大を示していると考えられる。

2. 品詞別反応出現率 男女差1%以上の反応語のみを対象に、その出現率を品詞別に合計したものが表7である。ここに示されたことは、前の反応種類数で示されたことと一致する。男子の方が高い出現率を示す反応語では形容詞よりも動詞が優勢であり、女子が高い出現率を示す反応語では形容詞が優勢である。名詞の値をみると男子の方が年齢とともに著しく増大するのに対して女子

表 7 品詞別反応率 (反応率の男女差 1%以上の反応語, 17刺激語〈名詞〉の合計, %)

反応率の大小	品詞	小 学 校 (年)					中学校(年)	
		1	2	3	4	5	6	2
(I) 男子>女子	名 詞	80.2	67.3	85.2	97.7	109.0	172.4	203.3
	形容詞	20.7	30.3	21.7	24.0	6.2	34.6	24.2
	動 詞	41.6	58.4	52.2	47.9	64.3	22.8	33.9
	その他	0.0	0.0	0.0	1.6	1.4	0.0	0.0
	計	142.5	156.0	159.1	171.2	180.9	229.8	261.4
(II) 男子<女子	名 詞	81.8	99.3	107.0	137.1	146.3	149.0	148.3
	形容詞	38.3	51.9	52.3	50.7	64.4	56.6	76.8
	動 詞	50.3	38.6	37.9	16.0	17.8	24.9	36.4
	その他	2.9	7.9	17.7	8.1	4.1	5.4	3.9
	計	173.3	197.7	214.9	211.9	232.6	235.9	265.4
(I + II)	名 詞	162.0	166.6	192.2	234.8	255.3	321.4	351.6
	形容詞	59.0	82.2	74.0	74.7	70.6	91.2	101.0
	動 詞	91.9	97.0	90.1	63.9	82.1	47.7	70.3
	その他	2.9	7.9	17.7	9.7	5.5	5.4	3.9
	計	315.8	353.7	374.0	383.1	413.5	465.7	526.8

の方が増大傾向が小さい。これは、動詞による反応傾向が年齢とともに減少するのに対して形容詞は減少しないこと、そればかりか女子においてはむしろ増大する傾向にあることによるものと考えられる。これはIIの3で示した品詞別反応出現率において、中学2年の名詞反応が男女間に有異な差を生じていることと一致する。また、男子の方が優勢な語と女子の方が優勢な語を合わせた反応率の総合計は学年があがるにつれて増大している。これによって年齢の上昇にともなって性差は増大していることが推測される。

3. 男性・女性優位語 反応出現率の差が1%以上ある反応語を、各刺激語に対する各反応語別にみてゆくことにより、男性に優位な反応語と女性に優位な反応語を求めた。方法としては、各学年を1点とし、例えば、男子の優位語を求める場合には、7学年中の6学年において男子の方のみに優勢な語として現れた場合6点、1学年だけ女子の方に現れた場合6-1点というようにして優位度を得点化する方法をとった。従って発達的な特徴はここでは無視されている。結果は表8の通り

である。これによっても、男子では動詞が優勢であり、女子では形容詞が優勢であることが示された。得点が3以上となる反応語についてその反応語の数を品詞別に示してあるが、その他を除いて行った χ^2 検定の結果、いずれも男女間に有意な差がみとめられた。

考 察

Palermo (1962) と Entwisle (1966) は、年齢が高い方では性差が不明瞭になることを指摘していた。しかし今回、反応出現率の男女差が1%以上の反応語をもとに、男子優位反応と女子優位反応を選び出すという方法で検討した結果は、いずれの優位反応もその反応種類数と反応率の総計が年齢の上昇に伴って増大し、性差が年齢とともに大きくなることを示していた。このことは、性差を見るために、全反応を資料として用いるとかえって輪郭がぼやけてしまう側面が、一部の反応に焦点をあてるとする方法をとることによって明瞭になってきたことを意味しているように思われ

表 8—1 男子優位反応

No.	刺激語	反 応 語 (得 点)					名詞	形容詞	動詞	その他
1	とり									
2	あさ	昼(間)(6)	食事(5-1)	夜(5-1)	起きる(3)	眠い(3)	3	1	1	
3	ぼうし	野球(7)	日よけ(4)	野球帽(子)(3)			3			
4	たまご	鳥(4)	食べる(3)				1		1	
5	とけい	回る(5)	腕(4)	動く(4-1)	鳴る(3)		1		3	
6	くすり	治る(6)	治す(5)						2	
7	うみ	魚(6)	釣り(4)	船(4)	山(3)		4			
8	にんじん	食べる(6)	赤(色)(5)	赤(っぽ)い(4-1)	畑(3)		2	1	1	
9	ひこうき	空港(3)	羽(3)				2			
10	しんぶん									
11	あし	はやい(5)						1		
12	じどうしゃ	エンジン(6-1)	スーパーカー(5)	動く(4-1)	かっこいい(3)		2	1	1	
13	すな	石(6)	砂鉄(4)	粒(4)	小さい(4-1)		3	1		
14	びょうき	薬(4)	いやだ(3)	癌(3)	恐い(3)	死ぬ(3)	4	2	2	
15	クレヨン	かく(5)	塗る(5-1)						2	
16	でんき	発電所(6)	しびれる(4)	光(4)	光る(5-1)	エジソン(3)	4		2	
17	いぬ	かみつく(5)	かむ(5-1)	走る(3)	はやい(3)	ブルドック(3)	1	1	3	
計							30	8	18	0

表 8—2 女子優位反応

No.	刺激語	反 応 語 (得 点)					名詞	形容詞	動詞	その他
1	とり	羽(5-1)	かわいい(3)	口ばし(3)			2	1		
2	あさ	明るい(5)	太陽(3)				1	1		
3	ぼうし	頭(7)	夏(6)	リボン(5)	きれい(3)	麦わら(4-1)	4	1		
4	たまご	白い(4)	にわとり(3)	ひよこ(4-1)			2	1		
5	とけい	数字(5)	針(5-2)				2			
6	くすり	苦い(7)	粉(4)	(お)医者(さん)(3)	飲む(4-1)		2	2	1	
7	うみ	青い(6)	広い(5)	しょっぱい(5-1)	波(5-1)		1	3		
8	にんじん	うさぎ(7)	オレンジ色(6)	橙(色)(4)			3			
9	ひこうき	空(6)	大きい(4)	たかい(4)	飛ぶ(4-1)		1	2	1	
10	しんぶん	(お)父さん(4)	朝(4-1)	字(4-1)			3			
11	あし	靴(7)	靴下(5)				2			
12	じどうしゃ	道路(5)	走る(5-1)	危ない(3)	排気ガス(3)		2	1	1	
13	すな	さらさら(7)	遊ぶ(4-1)	山(3)			1		1	1
14	びょうき	熱(6)	病院(5-1)	ふとん(4)	苦しい(3)	寝る(4-1)	3	1	1	
15	クレヨン	画用紙(4)	ぬり絵(4)	幼稚園(3)			3			
16	でんき	明るい(7)	つける(6)	消す(4)	暗い(3)			2	2	
17	いぬ	かわいい(6)	しっぽ(5)				1	1		
計							33	16	7	1

る。つまり、今回の分析において、ある水準以上に性差のみられる反応に限定して検討した結果については、年齢と共にむしろ性差がひろがっていく傾向がみられたのである。したがって、連想反応において性差を問題にする場合、分析の対象をある程度性差のある反応語に限定するという方法は、全反応の分析だけからは得られない性差の側面を明らかにする一つの方法として妥当なものであると思われる。

はじめに、反応の共通性の問題を取りあげると、最多反応による分析の結果は、女子の方が男子よりも高い共通性を示すという点で、Palermo, 梅本, Entwisle の指摘と一致した。これに対して反応種類数については、全体としては男子の方が高い値を示し、男子の共通性の低さを裏づけるものではあったが、十分に有意な差を見出すことはできなかった。この反応語の種類数は、しかし反応の品詞によって異なる。女子では男子よりも明らかに多くの種類の擬態語や擬声語が生じることが示された。

反応語をその品詞によって分類した結果からは、次のようなことが明らかになった。男子は女子に比較して動詞で反応する傾向が強く、女子は男子よりも形容詞、形容動詞あるいは擬態語や擬声語で反応する傾向が強い。但し、擬態(声)語による反応は非常に少数であり、なおかつ年齢が上がるにつれて減少する。従って動詞や形容詞にくらべて他の品詞の生起に与える影響は小さい。動詞は年齢が上がるにつれて男子においても女子においても減少する傾向があるが、形容詞は男子でも殆ど減少せず、女子では増大する傾向が認められる。このことは、年齢が高くなると男子の名詞反応傾向が相対的に女子よりも強くなることを意味する。表4の中で中学2年の名詞反応率が男子の方に高く、有意な差が認められたことはこれによって説明される。従って名詞の等質反応に限る限り、大学生では女子よりも男子の方が等質反応が多いという梅本の指摘と今回の実験の結果は一致するといえよう。

反応の内容について戸川他も梅本も、女子に心情反応が多いことを指摘している。今回の分析では、前回(荻野他 1977)と同様に、女子に形容詞

反応が多いことが示されたが、このことは心情反応について戸川他が述べていることを裏づけるものであると考えられる。もちろん、形容詞反応のすべてが心情反応であるわけではない。また心情反応は、女子よりも量的には少ないかもしれないが、男子にもみられる。これは乏しい資料からの推測であるが、男子の心情反応は女子のそれと質的に異なるのではないと思われる。たとえば表8-1・2にみられるように、女子では動物に対して‘かわいい’という反応語が多く生ずるが男子ではみられない。“じどうしゃ”に対して女子は‘危ない’と反応するのにに対して男子は‘カッコいい’と反応している。また“びょうき”に対して女子は‘苦しい’と反応するのにに対して男子は‘こわい’ ‘いやだ’と反応している。

今回の分析の中で、男子では動詞の反応語に女子よりも多くの否定語がみられることを示した。私たちは以前(荻野他 1976)、形容詞を刺激語とした場合に、刺激語の否定形(例. 高い→高くない)の出現率が小学校の低学年でピークを示し、それに時期的におくれて反対語の出現率のピークが生じるところから、否定語による反応を反対語による反応への移行段階としてとらえた。しかし、名詞に対する動詞反応において男子が女子よりも高い否定語による反応を示すということは、それとは異なり、男子の態度、あるいは反応傾向の特徴、即ち男子におけるネガティブな反応傾向を示しているように思われる。“びょうき”に対する‘いやだ’という反応もこのような特徴の一端ではないであろうか。しかし先にも述べたように、これはまだ少ない資料からの推論である。次に予定している形容詞、動詞を刺激語とした場合の資料によって再度検討してみたい。梅本が男子に多いと述べている反対語についても同様である。

今回の実験で用いた刺激語が、日常性の高い平易な語のみであり、性差をみてゆく上に、刺激語からくる限界があったであろうと思われる。また反応語の分類に用いたカテゴリーも、性差を検討するうえに十分適したものであったとはいえない。これらの点は今後の課題としていきたい。

引用文献

- Cramer, P. 1968 Word association. New York: Academic Press.
- Entwistle, D. R. 1966 Word associations of young children, Baltimore: Jhon Hopkins Press.
- 荻野七重・小杉洋子 1976 言語連想の発達的研究(1) 小・中学生について 日本心理学会第40回大会発表論文集 697—698
- 荻野七重・小杉洋子 1977 言語連想の発達的研究(3) 知能偏差値による分析 日本心理学会第41回大会発表論文集 683—684
- 荻野七重・小杉洋子・近藤和子 1979 小・中学生の学年別連想反応表 白梅学園短期大学紀要 15, 59—114
- Palermo, D. S. 1962 Cross-sectional comparisons of word association norms collected from fourth grade to college. Presented at Amer. Psychol. Assoc. Meeting, St. Louis.
- 坂本一郎 1965 教育基本語彙 牧書店
- 清水御代明・湯川良三・矢野喜夫・落合正行・清水佐保子・岡本夏木 1976 子どもの連想(2) 反応語の分析 日本心理学会第40回大会発表論文集 681—682
- 清水御代明・湯川良三・矢野喜夫・落合正行・清水佐保子・岡本夏木 1976 子どもの連想(3) 反応種類数の分析 日本心理学会第40回大会発表論文集 683—684
- 梅本堯夫 1969 連想基準表 東京大学出版会
- 牛島義友 1943 幼児の言語発達 愛育研究所紀要
- 戸川行男・倉石精一(編著) 1958 連想検査法 白亜書房

SEX DIFFERENCES IN WORD ASSOCIATIONS OF SCHOOL CHILDREN: RESPONSES FOR NOUNS

Nanae OGINO¹⁾ Yoko KOSUGI²⁾ Kazuko KONDO³⁾

Word association responses for 17 noun words were analyzed for sex differences.

Each noun word was given orally at every class and subjects (about 1600 primary school children—1st to 6th grade—and 260 pupils of lower secondary schools—2nd grade—) gave two different word responses.

The larger commonality was found in female responses: female subjects gave significantly higher percentages in popular responses than male subjects.

Sex differences were found in the parts of speech. While females were accelerated in giving adjectival responses, males were somewhat accelerated in giving verbs.

Furthermore, there found increase of sex differences in both sexes.

(おぎの ななえ 心理学)

(こすぎ ようこ 聖徳学園短期大学)

(こんどう かずこ 心理学)

1) Department of Applied Psychology, Shiraume Gakuen College, Tokyo.

2) Division of Early Childhood Education, Seitoku Gakuen College, Chiba.

3) Department of Applied Psychology, Shiraume Gakuen College, Tokyo.